

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科一年 劉郁希

今回のハイデルベルグ・ストラスブール大学研修ワークショップは「エコロジーと人文社会科学」をテーマにし、京都大学・ストラスブール大学・ハイデルベルグ大学の先生と学生の間で熱烈な交流が行われていた。

エコロジーという概念は狭義的に自然環境問題と思い込んでいたが、ここで人文社会科学と結びつき、広義的な意味で捉え直すことができる。この視点から、私自身を含め、京都大学の学生たちは幅広い問題点を基づき、自分の研究と思考を発表した。国民意識、文学など人文社会科学のテーマもエコロジーと緊密に繋がっていると、初めてわかった。発表した後に、ストラスブール大学とハイデルベルグ大学の様々な国の方とのディスカッションで異なる文化背景を実感した。自分が見慣れた社会だけを注目すれば、固まった考え方は制限がある。それを破るために、留学したり、外国の人と社会のことを学んだりすることが必要になる。このワークショップをきっかけにして、真剣に考えたことがない問題を考え始めた。それは「自然」とはなにか、「自然と人間」とはなにか。今まで人間中心となる社会論を考え直すことも必要ではないかと思う。

また、研究とはなにか。これも私が今回で考えた質問の一つである。巨視的な歴史問題や、非常に複雑な社会問題はともかく、そのほかにも課題になれる研究問題がたくさんある。例をいうと、今回ハイデルベルグ大学でのワークショップでは、日本の知覧特攻平和会館についての発表がある。その発表は、記念館の基本情報を紹介した上で、歴史研究者として感じた違和感と自分の考えを発表した。どうしてこの記念館の内容は客観性が足りないか、どうして展示の仕方が完備ではないと感じられるのかなどの問題点を、発表者が詳しく説明した。その後、自分の研究ルートとして、館長とのインタビュー、自分の調査結果と改善方法も言及した。これは小さな自主研究である同時に、非常に有意義的な研究と私は思う。研究というのは、ただの学術的な分析だけではなく、社会の中に問題点を発見し、問題の原因を判明し、自分の考えを論理的に論じることだと理解した。どんな小さな問題にも、研究する意義があるのではないだろうか強く感じた。

そのほかには、研修団の先生と学生と一緒にストラスブールとハイデルベルグ、この2つ大学都市に見学に行った。ストラスブール市歴史博物館と美術館などに見学することで、ストラスブールというフランスとドイツの間強くつながる地域の歴史、宗教、文化などの知識を身に着けた。また、欧州人権裁判所への訪問で、研修団の学部の学生は積極的にヨーロッパ及び世界中の人権問題について館内のスタッフに質問を出した。それを見た私は涙が出るほど感動した。今の若者の間に、人権問題に対して関心を持つ人が一人多くいても、社会はどんどんよくなっていく希望が見えるのだ。研修団の学生は主に学部二回生と三回生だが、彼らはすでに自分なりの考えを持ち、社会へ還元することに力を尽くすことを頑張っている。私はこのような学生たちを知り、今回の研修の大きな収穫の一つだと思う。

私は中国人学生として、日本へ留学し、更にドイツのハイデルベルグ大学に留学するたびに、自分のアイデンティティ問題にずっと悩んでいる。多く見れば見るほど、どのように自分を理解することがわからなくなった。自分の国籍、教育の背景、自分が理解する社会と社会問題などに対して、共感と違和感が同時に存在している。その答えを見つけるために、たくさんの人と出会い、たくさんの本を読み、たくさんのところに見学に行く。自分と他者の異同をはっきり分別したいためである。研究の目的と人生の目的に当惑している私は今回の研修プログラムに少しだけ進む方向が見えるような気がした。たくさん人の話を聞いた上で自分の道を見つける。他人と同じような悩みがあると、一人で戦っているのではないとわかった。人と人の心が結びつけることも感じた。

すべては「人間」ということである。社会問題と言っても、自然と言っても、文化（文化越境）と言っても、全てが人間同士の交流と流れの問題となる。今文化越境の専攻で勉強している私も人間の動きを研究していると言っても良いだろう。今までとこれからの留学生生活を、学術研究だけではなく、人生のためにも精一杯活かしたいと思う。最後に今回のプログラムを支えて下さった各大学の先生方、職員と学生すべての方々に深い感謝の気持ちを伝えたいと思う。